

連句会案内

雁帛往来

※連句教室  
日時 第一日曜日 午後一時〜五時  
会場 関口芭蕉庵  
文京区関口二ノ一ノ三  
(電) 九四一一一四五

※柏連句会  
日時 第二日曜日 午後一時〜五時  
会場 光ヶ丘近隣センター  
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地  
マーケット下車)

※A・C・C連句・理論と実作  
日時 第二・四水曜 午後一時〜三時  
会場 新宿住友ビル四十八階  
朝日カルチャーセンター  
(電) 三四四一一九四一(代表)

※猫養会(会員制)年四回  
(二月・四月・七月・十月 第三水曜日)  
会場 松声閣  
文京区新江戸川公園内  
(電) 九四一一九六四九

△御注意△  
柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、昨年六月から第二日曜に変更しました。(八月は休み)

▽九月二日 関口連句教室出席。本日、電脳連句の林義雄先生初出席。連衆十八名の盛況なり。

▽九月六日 柏連句会、会者十五名。表六句を作る。第六回国民文化祭へ応募のため。▽九月十二日 A・C・C出講。

▽九月十四日・十五日 新庄市の第二回全国連句新庄大会に出席。杉亭・徒司・正江・和子・千町・清子・郁子同行。北陽社の面々と交歓。蛙川村羽根沢温泉で一泊。

▽九月十九日 南柏光ヶ丘近隣センターで正式俳諧下稽古。夜、台風十九号来。

▽九月二十四日 荻窪の四宮連句会に出席。▽九月二十六日 A・C・C出講。

▽九月二十七日 電通連句部に出席。

▽十月七日 関口連句教室出席。会者十九名。下の椅子席を使って三卓とする。

▽十月十四日 柏連句会出席。

▽十月十七日 深川芭蕉記念館で第十回俳諧芭蕉忌。正式俳諧興行後、七卓に分かれ二十韻興行。本日「ねこみの通信」創刊。

▽十月十九日・二十日・二十一日 第五回国民文化祭連句大会出席のため、猫養軍団と一緒に松山市へ行く。松山観光のあと、二十日は子規記念博物館の会場で、四十二席に分かれ半歌仙興行。この間、皇太子殿下の御視察あり。募吟の表彰に猫養の入賞多く満足。五時松山をたち面河溪に一泊、翌日、土佐を見て帰京。

▽十月二十四日 A・C・C出席。  
▽十月二十五日 電通連句部出席。

季刊「連句」第三十一号

平成二年十二月一日発行

編集人 東 明 雅  
発行人

季刊「連句」発行所

▽277柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方

電話 〇四七二(七五)二九二

振替口座 東京七一五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277千葉県柏市酒井根六二六一

電話 〇四七二(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共  
一年 二〇〇〇円 送共

第31号 連句 季刊



連句と若者（南柏雜記 29） ..... 1  
 芭蕉の連句と現代連句 ..... 廣田二郎 ..... 2  
 「鳶の羽も」の巻鑑賞（X） ..... 東 明雅 ..... 4

第十回俳諧芭蕉忌 ..... 第三十五回猫菫会 ..... 8  
 正式俳諧興行 脇起り二十韻 新薬の 捌 秋元正江  
 文 福井隆秀  
 二十韻 七卷 捌 氏原正雄 雜賀 遊 杉江杉亭 東 郁子  
 本屋良子 山崎一恵 若尾よしえ  
 文 下鉢清子 原田千町

「蓑虫」付勝練習二十韻 ..... 14

第五回国民文化祭 ..... 秋元正江 ..... 16  
 半歌仙九卷 捌 東 明雅 秋元正江 式田和子  
 下鉢清子 杉内徒司 中島啓世  
 原田千町 東 郁子 福井隆秀

新庄市第二回全国連句大会 ..... 式田和子 ..... 20  
 作品 三卷 捌 式田和子 杉内徒司 杉江杉亭

作品 四卷 捌 秋元正江 瀧川雅代 東 明雅  
 文音 清水一與・矢崎 藍 ..... 22  
 百萬のこと ..... 佐藤廣幸 ..... 24  
 雁帛往来 ..... 29  
 新刊紹介 ..... 7

# 連句と若者

南 柏 雜 記 29

雅

松山の国民文化祭で連句は一気に盛り上がった。皇太子殿下の台臨を仰ぎ、四十二の俳席で一斉に俳諧が興行されたということは、空前の盛況であり、感激したことであった。先師芦丈翁がもし御存命であったら、さぞかしおよろこびなされたことであろう。連句を国民文化祭の行事の一つに加えるのに尽力された草間時彦先生、暉峻康隆先生、そして、二年前からこの大会の準備に没頭して来られた鈴木春山洞氏、この三方の功績を連句人は決して忘れてはならぬだろう。

そのように、今度の松山の国民文化祭連句大会は大盛況であり、大成功であった。ただ、皆が気が付いていたように、集った人たちの平均年齢が極めて高く、若い人たちの影が寥々たるものであったことに、いささかの懸念が残ったのも事実である。会場の子規記念博物館前で、全員集合して写真を撮ったが、多くは白髪・倚杖の人で、暗澹とした気になったのは私一人だけではなかった筈である。この日「連句の来し方行く末」という記念講演をされた

暉峻康隆先生も、この点を特に取り上げられて、連句は簡素な式目を早く作るべきだと主張された。簡素な式目が出れば結構であるが、果して、それだけで若者を吸引できるかという点、私は大きな疑問を感じる。

連句が若者に魅力がないのは、彼らの学校教育の在り方によるものである。現代の中学・高校の国語教育は、古典を軽視し、芭蕉のすぐれた連句など一つも取り上げていない。たまたまあっても大学受験に関係のないものとして実際に教えられないし、また、はっきり言って生徒に芭蕉連句のすばらしさを説くことのできる教師はきわめて稀と言っても大同小異である。少年・青年期になじみのないものに若者たちが魅かれぬのも尤である。

次に、彼らを魅するだけの新しい連句の作品がまだ現われていないということがあげられよう。すばらしい、これぞ平成の連句と、彼らに示せるものがどこにあるか。よい作品も作らず、彼らを引きつけるものもないにせよ、ルールがどうだとか、式目が難しすぎるとか言うのは本末顛倒であろう。魅力さえあれば、どんな難しいルールでも、こなしに行くのが若者である。若者を馬鹿にしてはいけぬ。マージャンのルール、ゴルフのルールは決してやさしくはないのである。

# 芭蕉の連句と現代連句

廣 田 二 郎

『古事記』には、神武天皇と大久米の命、同命と伊須氣余理比売、日本武尊と御火焼の老人との問答の歌を記している。日本で古代以来五七調を基本とする問答の歌が作られていて、それらについて『古事記』の成った奈良朝時代に語られていたことが知られる。また、同時代にもこの問答唱和形式による作哥は勿論行われており、そういう基盤の上に神武天皇や日本武尊の問答哥も極めて自然に語りつがれ、受容されていたのである。

以来この伝統は中絶することなく、近代にまで一貫して流れ続いて来ており、とりわけ中世には二句の問答哥に三句目を付け、さらに四句以上、ついには百句に至る長大な作品にまでなり、作者も三人以上の複数に増加した。作品の内容も高まり、宗祇作を頂点とする連哥のジャンルが成立する。そして、連哥は中世武士階級の詩として栄えたのであるが、また二句の付合による日常語の問答哥も広く一般に好まれて来た。それは、江戸時代に入ってから、貞徳等による百韻俳諧連句にまで成長する。貞徳一派の連句でも、ことはやはり一般的な日常語——俳言——を用いたが、しかし連句を文芸にまで高めようと考えたために、古代以来持統して保有していた諸謔滑稽のおもしろみを失っ

てしまった。それを回復しようとして、宗因・西鶴等の談林調俳諧が興り、芭蕉もその渦中であって大いに笑い興じる数年間を過している。しかし、その詩性を喪失した低次元諸謔滑稽に空しさを感じはじめ、彼は三十代の終りに近づいた天和年代から、俳諧連句に詩性を取り戻し、もって近世詩として確立しようと思ひはじめた。『次韻』『虚栗』などの連句作品にそれを見ることが出来る。滑稽なことばの遊戯から超脱して、吟詠を純正な詩として高める、連句ジャンルにおける史的な変革を遂行した。

文学史における史的変革は、いずれの国にあって、外国文学の思想、表現・用語、トーンの撰取を方法とするが、芭蕉も天和の俳諧の史的変革は漢詩文から得ている。

しかし、彼の求めたところは俳諧の史的変革であったから、用いることは、表現は俳言——古典文学に用いられていない、日常一般の通用語や漢語の類——のそれであった。そうして、貞享から元禄年代にわたって、『野ざらし紀行』『笈の小文』『奥の細道』の旅の体験と、旅中における各地門人との連句興行、発句詠吟についての指導、質疑応答などを通して、発句・連句・紀行・日記・俳文等の全ジャンルを包括する蕉風俳文学の体系を確立した。

この達成は、全俳文学史を通じての最高の水準を極め、以後現代に至るまで、これを凌ぐものは出ていない。江戸中期安永天明の蕪村、末期文化文政の一茶等も大きくいつて元禄以後の蕉風の展開の裡にある。その延長の線上に明治時代に入ってから俳文学はあった。

しかし、鎖国制を解いた明治期には、西洋の近代文明が洪濤の様に押し寄せて来、文学も全ジャンルにわたって近代化されて行った。俳諧文学も例外ではなかった。明治二十年代に子規を中心とするグループは、俳文学革新の流れを主導した。虚子は、明治三十七年八月発行の「ホトトギス」で従来の俳諧連句の名称を連句と改めたが、それより先、子規は「連俳は文学に非ず」の説を「芭蕉雑談」の中で唱えている。

以上の様なことから「連句は文学に非ず」とする説が全俳壇を制圧し、連句を制作享受する人達は稀少になっていった。明治中、後期から大正昭和を経て、戦後二十余年を経るまで、そうした状況は変らなかつた。

しかし、昭和四十五年春から四十七年にかけて季刊雑誌「すばる」に安東次男氏が連句をすぐれた詩として認め、芭蕉七部集の哥仙連句の評釈を連載しはじめてから状況は一変した。すぐれた詩人であり、フランス近、現代詩に精通している安東氏の所説、評釈は俳壇、文壇に大きな衝撃を与えた。子規、虚子等は、連句が付け進むに従って二付の付合毎に詠むところが変化し、哥仙、百韻等の全巻にわたって一貫した意味・内容を持っていないから文学ではないという説を唱えた。西洋近代の写実主義文学の全面的影響下に入っていたわが国の文壇、俳壇は、子規等の連句非文学説に盲従し、それが八十余年も続いていたのであったが、その間に西洋ではフランスのボードレールに始まる象徴派から二十世紀に入ってからマラルメ、ヴェルレーヌ、

ランボー、ヴァレリー、エリュアール、ゲールモン、ブルトンなどの抽象派の現代詩まで、詩のジャンルにおける大きな文学史の変革が展開していた。わが日本の俳人達、俳諧研究者達はそのことを知らなかつた。その蒙が安東次男氏によって開かれた。またフランス文学者であり、詩人であり、俳句の作者であり、俳誌「楨」の主宰である平井照敏氏も連句をすぐれた詩形式と認め、安東説を支持している。現在では、こうしたことをきっかけとして、明治以来の連句非文学説は打破され、連句はすぐれた詩として評価し直され、また連句を制作するグループも各地に見られるに至っている。

これらの総体を包含する現代連句の詠むところは人間存在の現実の相であり、自然世界の無限の推移の態様である。従ってことば、表現もわれわれが日常一般に用いている用語、表現、すなわち俳言をもってする。つまり俳諧文学としての本質を確固として保持しているのである。こうした点において芭蕉の連句と現代連句はまさに共通のあり方を持っている。芭蕉の連句と現代連句の用語、表現が異っているのは、ことばと、それをもってする表現は時代とともに変化する——つまり流行するので、一見著しく異なる様にも思われるが、その本質における不変性すなわち不易なるものは確固として保持しているのである。ただ詩としての高さにおいては、現代連句はまだ満足すべき水準には達していないので、つねに芭蕉連句の次元を思い、その高さに至ることを目指すべきであろう。

## 「鳶の羽も」の巻鑑賞 (X)

東 明 雅

30  
青天に有明月の朝ぼらけ  
湖水の秋の比良のはつ霜

芭蕉

(現代語訳) 青々と澄んだ朝空に有明月がかかり、湖水も秋だけ比良の峯には初霜がおりる時節となった。

(付心) 其場の付。

(付味) 響。「三冊子」にこの付合を評し、  
青天に有明月の朝ぼらけ

湖水の秋の比良のはつ霜

前句の初五の響響きに心を起し、「湖水の秋」「比良のはつ霜」と清く冷しく、大きな風景を寄す。  
と言っている通りである。

(転じ) この転じもよく利いていて、打越・前句の修羅場のイメージが全く消滅して、ただ冷々とした広々とした景色に転換され、急迫の気分から優游の気分へ転じた。

(補説) 湖水、ここはもちろん琵琶湖のことである。前句の「青天」に応じた用語。比良は琵琶湖東岸にある山、海拔千二百米余。「前句の手柄に競はず、それに花を持た

せて助けながら巧みに引立たせて、青天—湖水、有明月—初霜と、景象の対応、映発を示し、前句の景象を活かし深むべきものとしてこの大観を寄せ、天象に地象の骨格を与へて大画面を完成せしめた処、さすがに一座の師父たるに背かぬ付振りである(天野雨山「猿蓑連句評釈」)  
はつ霜は冬の季語であるが、ここでは特に「秋の……はつ霜」と晩秋のころの初霜としている。近江八景で「比良暮雪」が有名であるため、比良の初雪では陳腐となるので、初霜としたのであるが、雪と異なり、霜では遠望の景としてふさわしくない。これについてもさまざまの説があるが、要するに詩人の心象風景としての初霜で、その虚実を論ずるのは意義がないことであろう。

31  
湖水の秋の比良のはつ霜  
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ

(秋。蕎麦。人情他)

史邦

(現代語訳) 比良の初霜が見られる頃、湖畔に閑居する隠者は、鼠の蕎麦を盗まれたが、それを歌に詠んで一向意

に介しない。

(付心) 起情の句。前句のさわやかな景から、物慾にこだわらぬ洒脱な人柄を付けた。また、「古今著聞集」巻第十二にある澄恵上人の面影の付(補説参照)。それに湖南の幻住庵に住んだ芭蕉のイメージがダブっているであろう。

(付味) 前句、湖国の秋の爽涼の気分、天空海濶、洒脱で楽天的な人柄がよくマッチしている。  
(転じ) 前の二句に肅殺の気が滞っているのを一転させ、ユーモアの気分を出して緊張感をほぐしている。

(補説) この前句が、和歌の下句の調子に似ているから、上句を補うような気持で付けられている。「歌をよむ」とはその気持のあらわれでもある。

この僧都の坊の隣なりける家の島に、そまむきをうへて侍けるを、よる盗人みなひきてとりたりけるをききてよめる。

ぬす人は長はかまをやきたるらんそばを取てぞはしりさりぬる

「そば」に蕎麦と衣端(ももだちともいう。袴の左右、腰の部分のあいた縫い止めの部分)。「蕎麦を奪」と「衣端を取る」(ももだちを取る。動作を自由にするため袴のももだちをあげて帯にはさむこと)の掛詞の洒落。

蕎麦は「猿蓑付合考」に「唯蕎麦と斗は雑也とぞ。さる

(補説) 前句の人をおそらく初老も過ぎた人と見て、その人の衣類をあしらったものである。ぬのこには恰に対する綿入れの意味と、絹物の小袖に対する木綿のものという意味とがあるが、ここでは前者に重点を置き、季節の推移とそれに対する老人の心境とを詠んだものと解釈した方がよい。後者に重点を置くと、今までは小袖など着ていた人が零落して木綿物を着習うようになったという意味になる。しかし、ぬのこに対するわびしい気分は、ここであまり強調すると、前句の余裕が活きてこないので取らない。

33

ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ  
押合て寝ては又立つかりまくら

芭蕉

(現代語訳) 風が身にしみ布子が身になじむころ、旅人たちは押しあいへしあい一夜の宿を明かし、また別れ別れに発って行くのである。

(付心) 其人の付。また面影の付(補説参照)

(付味) 位付。ぬのこに連想されるわびしい情趣が付句にもうつつている。うつり

(転じ) 打越の句は柴の戸に住んでいても歌を詠むほどの余裕があったのに対し、これは全く俗な庶民の生活そのものの描写で、気分の上からも大きな転じである。

(補説)

「押よふてねては又たつかり枕

を秋につれては秋とする事、句のなり安きやうにと事を広くしたるにや。擬新蕎麦は九月中頃より末専なれば、比良に霜みゆる時節なり」とある。

作者の史邦は、先に盧同が男を出し、ここでまた澄恵上人の面影を出している。この人には古典癖があったらしい。名残の裏になって、軽く一巻をあげるようつとめるべきところに、こんな特異な人物を持ち出すのは、ちょっとどうかと思われなくてもないが、名残の裏でも、折立だからまだ許されるかも知れない。

32

柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ  
ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ

凡兆

(冬。ぬのこ。人情自)

(現代語訳) この草庵では蕎麦を盗まれてそれを和歌に詠むようなこともあったが、このごろはまた風が冷たくなって布子を着ならうようになった。

(付心) 会釈の付。其人の付。柴の戸に住む人の状態を秋から冬に季移りしながら描いた。

(付味) 蕎麦と布子は位の付になっている。また、両句には一種のわびしい風情がうつりあっている。

(転じ) 打越は湖国の秋の清爽な景色で、前句とあわせて広々とした一種の朗らかさがあるが、この付句は冬の寒い風をわびる人の姿があり、前句と付けると一種のあわれさがにじみ出て、気分の上でも大きな変化がある。

火とぼしにくるればのぼるみねの寺

ケ様の句ども、たれぞの面影に立申候句にて御ざ候、尤、他流にもケ様の句ども御座候へども、何の心もなく仕たると、心をよせて仕たると、付肌各別の意味出申候(「浪化宛去来書簡」)

右の文章によれば、芭蕉のこの句は誰かの面影で付けられていることになる。芭蕉はこの句を作る前の年、「おくのはそ道」の旅で、半歳にわたって、さまざまの土地でさまざまな旅宿の体験を実際にして来ているのである。むさくるしかった飯塚の宿、盲法師の奥浄瑠璃を聞いた塩釜の宿、泊るべき宿がなくて困った石の巻の体験、ことに「蚤虱馬の尿する枕もと」と詠んだ尿前の封人の家、遊女と一つ家に寝た布振の宿の思い出などは、この句を生む背景として、きつと去来・凡兆・史邦など、この句の連衆にも話されたに違いない。芭蕉はこの句を作りながら、「おくのはそ道」の体験を反芻していたのであろう。ことにその旅の途中、加賀の山中温泉での三吟の一節、

霰降左の山は昔の寺

北枝

遊女四五人田舎わたらひ

曾良

落書に恋しき君が名も有て

翁

に出て来る田舎わたらいの遊女などは、この句の面影としてびったりである。遊女に限らず、物詣での旅の道者など、一人の旅と見るよりは、四・五人の複数と見る方が、打越からの変化もあってよい。

せまいむさくるしい木賃宿、あるいは宿坊などに泊りあ

わせ、押しあいへしあい、蒲団もろくなしのごろ寝に一夜を明かした旅人たちが、お互いに名も知らぬまま、西東に別かれ、また、そのような日々を重ねてゆく、それはまさに貧しく、わびしい浮世の象徴であり、そうなり得た点にこの句のすばらしさが存在する。

34  
押合て寝ては又立つかりまくら  
たゝらの雲のまだ赤き空  
(雑。人情無)

去来

(現代語訳) 旅人たちが早立ちして行くと、鋳物師がたたらを踏んで鉄を造るその煙が雲となって、まだ暗い空を赤く染めている。

(付心) 其場の付。天相の付。  
(付味) ここは花前の句(次は句の花)であるから、其場の景色を軽く付けている。

(転じ) 打越の夕ぐれから、この句は夜明けと時刻は変わっているが、気分はあまり変わっていない。

(補説) この句は、この巻中一番の難句で、諸説紛々、帰するところを知らぬ有様である。大きく二つに分けて、たたらを踏躰と解し、鋳物師の作業と関係させて説く説と、たたらを地名、それも山あるいは浜の地名として見る説とに分かれる。しかし、これを山または浜の地名として見ると、三句前に「湖水の秋の比良のはつ霜」があり、式目にははずれていないけれども、湖水と浜、比良とたたら山、

しかも同じように天相と結ばれた人情無の句であれば、遠輪廻(同じような事物・趣向が何句か距って出ること)になりはしないか。私はそのようなところから、踏躰説に賛同するものである。

去来は前句を、芭蕉が自然と旅ゆく自分とを念頭に作った句であると考えていた。それで旅人としての芭蕉に、珍しい踏躰などの景を付けて、さらに彼の旅心を誘う意があったのではないかと思う。古注のうちでは、「旅同者の朝もまだ立出る景色を付たるにて、たたらは鋳物をする道具也。鍛冶・鋳物師等皆早起にして、大なる鋳物には踏躰を用ゆる。其煙炎夜の明けきらぬうちは、赤く立登りて見ゆるなれば、その煙りといふべきを、東雲に懸合せて雲と作りたる手柄たるべし城下町など旅立さま見ゆるが如き付也」(「猿みのさかし」)が最も妥当で、わが意を得ている。

☆新刊紹介☆

- ☆松山連句会  
いでゆのかをり  
第二巻  
永田 黙 泉 編  
平成二年十月一日刊
- ☆歌仙 鼎集  
同会の作品十一か年分一七八巻所収  
岩 淵 喜代子  
歌仙十六巻とコメント 森 玲子 編  
所収 一九九〇年十月初版

第十回 俳諧芭蕉忌

第三十五回 猫蓑会

平成二年十月十七日  
於 深川芭蕉記念館

恒例の芭蕉忌を十月十七日(水)深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を厳肅な中に和氣藹々と興行した。その後、二十韻七巻を首尾した。参加者 三十二名

第一部 正式俳諧興行 「しぐれ哉」 一巻  
第二部 二十韻七巻

- (一) 役割
- 宗匠 秋元正江
  - 脇宗匠 式田和子
  - 副宗匠 豊田好敏
  - 執筆 福井隆秀
  - 知司 下鉢清子
  - 副知司 滝川雅代
  - 座配 小川千雪
  - 座見 小川千雪
  - 花司 原千健
  - 香元 内田千健
  - 配元 梅田利子
  - 同 篠原達子
  - 同 蒲原志げ子

- (二) 次第
- 一 席改め
  - 二 席入り
  - 三 配硯
  - 四 献花
  - 五 執筆呼び出し
  - 六 文台捌き
  - 七 俳諧興行
  - 八 花前
  - 九 献香
  - 十 花の句披露
  - 十一 端作り
  - 十二 吟声
  - 十三 文台返し
  - 十四 作品奉納
  - 十五 納硯
  - 十六 挨拶
  - 十七 退席







の世界は、各人が磨き上げた個性の美の魅力であろうと解するとき、この正式俳諧の型は俳諧に於ける究極の美、理屈抜きで心引かれる「花」の正体でしょうか。

「歌膝になったら清子さんの顔を真っ直ぐに見るから、視線があったらそれから次の言葉を言うのですよ。」

は、割稽古の折の隆秀執筆のご注意。同性とも視線を合わせるのを好まない私が、まして異性と、この方が至難の技ではないでしょうか。まして花眼とみに進んで眼鏡越しでも遠近覚束無い私の視線、しかし、随分と遠方の座に構えられた執筆と臚な私の目が幸いして、視線が合ったつもり、

「以上でめでたく執筆の文台捌きが終わりました。これよりいよいよ俳諧興行！」

上州生まれの私は、ベイベー言葉ならばすらすらと、難なく続けられますのに、斯くの如き標準語的日本語の連続は大の苦手ながら、無事大役を勤めさせて頂きました。長い年月に亘って洗練され尽された俳諧の作法は、高い教養を加味しつつ、女時の「美の世界」「花の世界」を綴るであろうと思いつつ、知司<sup>ちし</sup>を学ぶ機会を与えて下さった明雅先生にお礼申し上げます。

### 花司役を勤めて

原田 千町

この度、俳諧芭蕉忌の花司役を勤めさせて頂きました。今までに配役は幾度かさせて頂きましたが、始めて花司役をおおせつかり、正直のところ慌てました。私は花は駄目で、とご遠慮申し上げたのですが本気にしていただかず、それほどなもお花のお免状一枚程はお持ちなのが常識、家の中に花を絶やさぬよう心がけておりますものの、生け花の域には程遠く、多くの自己流、娘時代に人並みの稽古をしておりましたらよろしかったのですが、その当時は枝を矯めたりします事に些か抵抗があったりしまして殆ど習わなかったも同然姉の方は好きで現在まで続けておりますが在米中で教わる訳にも参りません。今さらの後悔先に立たず、知人を尋ねたりしての俄か入門となりました。前回にこのお役をなさった山崎一恵様から一式をお受けしまして、この花器での投入花だけをお教え戴きたい、と誠に我が儘な注文をいた

します新弟子を快く受け入れて下さる先生に幸いめぐりあえました。

当日は朝の内に先生のお宅へ伺いますと、いっばいに紅葉した満天星躑躅が置かれ、その中からあまり丈も高くなく、枝振りの面白い、また花台に乗せて収まりのよい枝を取っていただきました。ほかは竜胆に鳥兜に小菊、竜胆は近ごろのもの、あまりに真すすぐでびっしり花をつけ風情が少ない様です。鳥兜の紫と花姿の良さを選んで小菊をあしらうことになり、いずれも具合良く器に止まってくれますので、どうやら自信をつけて御席に臨みました。執筆の隣、花司の座につき、いよいよ正式俳諧の開始、席入り、配役がなされ、宗匠正江様の凜としたお声が「献花」とひびきまして席の中央に進み出ます。考えますと四方を猫養諸兄姉に囲まれそこで花を生けますとは晴れがましいことで、ただ皆様の前で手順を間違えず付け焼き刃の檻標を出さずに、芭蕉様へ花を捧げられればと思うばかりでございました。どうやら無事にお役を果たし席に戻りましたら、急に動悸のげしさに気づき隆秀様執筆の見事な文台捌はほとんど夢心地で拝見していた次第です。

## 養虫

付勝練習二十韻  
東 明雅

投句締切  
1月20日

- |      |                 |     |
|------|-----------------|-----|
| 十二句目 | 客待つ暖炉あかあかと燃え    | 達子  |
| 十三句目 | 据え膳は食はぬと言った嘘もばれ | 志げ子 |
| 十四句目 | 電算三課セクハラの罫      | 藍   |
| 治定   | 虫も殺さぬ優男なり       | 美鈴  |
| 1    | 朝帰りなど当然のこと      | 妙子  |
| 2    | 不作一生不立後悔        | 弘次  |
| 3    | 後は野となれ恋は盲目      | 治子  |
| 4    | ケセラセラセラなるやうになれ  | 美幸  |
| 5    | 少しきまりが悪い産院      | 鋭太郎 |
| 6    | 「死ぬ程好き」の相手日替り   | 雅代  |
| 7    | 女難・金難・宰相の椅子     | 麻子  |
| 8    | かかあ天下で万事円満      | よしえ |
| 9    | 蓋を開ければ婆とコブ付き    | 淳子  |
| 10   | 三界にいま男家なし       | 美和  |
| 11   | パンツ論争知るや知らずや    | 達子  |
| 12   | 女となりてよりの饒舌      | 慶子  |
| 13   | 還暦すぎの浮気いたまし     | 敬子  |
| 14   | 忍ぶ恋路にふと思ひ草      |     |
| 15   | 一生不犯が聞いて呆れる     |     |
| 16   |                 |     |

※刻に詠むのは自然であるけれども、それだけでは単調に陥りかねないからである。ところで、今回の場合は、すでに前句に十分の卑俗性、滑稽性がある。だから、次の付句は、ことさらに卑俗・滑稽を必要とはしないで好もう。

雅なるものの中の雅を詠んで人に感動を与えるものが和歌ならば、俗なものの中に雅を発見するのが俳諧であり、俗なものの中に俗を求めておもしろさを求めるのが川柳である。前句の俗の中に、何か俗ならざるものを発見し、とらえて付句をし、前句・付句の間に人生のあわれ・さび・しをりを描くのが連句である。

そのような考えに立てば、14などは老いらくの恋の悲惨さを詠ってあわれがあるけれども、一句がやや説明的である。15は和歌調で、ちょっと古いのではなからうか。16・17・18はそれぞれふざけた調子で、前句とあわせて、これこそ川柳の世界であろう。19は新しい時事の句として、また人名を出したところに魅力があったが、これも要するに軽い川柳の題材である。20は前句の人の「其人」の付けで、付き過ぎる程よく付いているけれども、一句の表現までが真面目すぎてもおもしろくもおかしくもない。この点1も同様である。2は嘘がばれて据え膳を食ったのだから、朝帰りには当然だということになるとやや理屈めきはしないか。3据え膳を食ったため一生不作の女房を持ち後悔している意としては、何か表現が不十分である。4「言い習わしに又言い習わし」の付けは「かか」という御質問であったが、それは構わないけれども、同じことなら5の方が近代的で

- 17 とんだ茶番の与三郎なり  
 18 私としたことがお粗末  
 19 聖子に通ふ金髪の情人  
 20 平素は真面目一方の人

この巻、ナオの初めあたりまでは割合におとなしい句が続いていたが、前句がちよっと悪い句であったため、ここで一波瀾が起った。「据え膳」とは卑俗な言葉である。しかし、女性が万事積極的になった当世では、このような現象は随分と増えて来たことだろうし、その意味で、これからの恋句にも屢々現われるだろう。「据え膳」はその意味では、死語ではなく、ちゃんと現代に生きている言葉である。近頃、映画の影響で「アゲマン」という言葉が流行し、連句でも時々使った例を見る。「据え膳」も「アゲマン」も川柳に使われたら最も効果的な言葉であろう。もし、連句の中に用いても、初折に出すのはちよっとはばかられる。この巻でも、初折にはやさしい夫婦愛が唱われた。だから初折の恋とは一味ちがったものを出したいと思う。

さて、先師芦丈先生はつねづね、「恋の二句目で笑わせろ」ということを教えられた。元来、恋句は一句で捨てず、二句は必ず続けることになっているが、その際、その二句目にはすこし滑稽なことを言って、読む人を笑わせるというものは、恋句は元来最も痛切・深刻なものゆえ、そのようなものばかりだと、必ず恋句で一巻全体が重くなり、軽みがなくなくなるのを恐れたためであろう。恋を美しく詠むのはもともと和歌の伝統である。俳諧でも恋は美的に、深※

おもしろいと思う。6もおもしろいがやや理屈であろう。7はよい付句である。据え膳を食うような人によくある性格で、次から次への浮気沙汰、それは怪しからぬと非難もできるが、その浮気の性が本人が生れ持った業だと考えると、どうにもならぬあわれさがある。おかしくて同時にかなしい人間の姿をよく見ているし、表現も軽くてよい。8前に何とかという総理が居ましたね。あの人も滑稽で可愛そうでした。9これは3とは逆で、据え膳を肯定し、あげくは夫婦円満というわけですね。確かにこんな付け方もありますね。10これもおもしろい。自他半ですね。11情ない。こんな世の中に誰がしたのか。12これも情ない。女性が強い世の中ですね。13女が饒舌なため秘密がばれたという付け方は近すぎるようですね。

さて治定の句、「初ウの恋がなごやかでクラシックムード。また打越の暖炉もあたたかに燃えているので、思いきって憎ったらしい現代の恋の末路にしてみました。OLの据え膳はどこわいものはありません。そして女は若くてきれいなとき最も酷薄。電算部にはキーパンチャーがたくさんいます」と言うハガキの通り、現代社会の一面を鋭く描いたこの句には迫力があり、事象そのものには男女の運命を語るあわれがある。従ってこの句を採用した。人情他の句。前句は自他半。

次の十五句目。もう恋句はよろしいでしょう。雑でそろそろ外に出てもよいと思います。

## 第5回国民文化祭に参加して

秋元正江

伊予の秋たけなわの平成二年十月二十日、国民文化祭の新規分野に「連句」が正式種目として採用され、その実作会場には、皇太子殿下をお迎えするという光栄ある連句大会となりました。

応吟七三九巻、応募は全国都道府県二六県の広範囲に及び、大会参加申込者は三〇〇名を越し、当日の会席数は四二席、会席名は愛媛県の各市長村に自生している樹木の名を採用、特産の伊予緋の藍染めに木の名を染めた袱紗の会席飾り、この藍色は、どんなに連衆の心を深めてくれたかわかりません。

各捌きの席は一期一会の精神によって、初めてお会いする方が殆んど。表六句を終るころは何となく気ごころもわかって、恋句では短冊を沢山頂き、じつくり楽しむ余裕もできました。この時、皇太子様がにこやかに見えにいられたのです。連句実作の場にお立ちにいられたのです。連句実作十数分が経って、お送りする拍手が静かに

湧き上がりました。半歌仙の実作が終ってから、玄関前で全員記念撮影、二台のカメラをつないで脚立に上った写真屋さんは皆の顔を取めるのに大重。正午の秋の陽を充分に浴びながら、子規記念博物館で連句が催されたという時代の流れに感無量でした。

午後からは、愛媛県知事、松山市長、連句協会会長挨拶、暉峻康隆先生の「連句の来し方ゆく末」の記念講演、入選者発表、ついで表彰式、審査講評と進み、この度の応募の半歌仙の形式を「愛媛」と命名したことの大会提案に全員拍手、次回開催県「ちば」の今泉宇涯先生のユーモアで熱っぽいご挨拶、地元から「おとうさん」の声援のなか、鈴木春山洞先生の閉会の辞は、国民文化祭運動に四年の歳月を過ぎられた凛としたお声に、大会の責任を見事果たされた美しいお姿がありました。

会場に迎えにきたトサデンのバスで一行は今宵の宿の面河へ出発、面河渓谷は石鎧山に源を発する面河川の上流にある紅葉の

名所で、道幅の都合で途中宿の迎えの車に乗りかえトンネルをくぐって着いた山の宿はぐっと気温も下っていました。しかし、夕食後には四席の二十韻に、測の瀬音も高まったのです。旅の三日目も快晴、車は土佐路へ、和紙会館、横浪スカイライン（残酷焼の昼食）、仁淀川大橋から桂浜、闘犬センター、高知城、日曜市、五台山竹林寺へ文殊堂に手を合わせた頃は刻々と秋の日が昏れてきました。全員無事に全日空の高知発の最終便のシートベルトを締めると、松山城、道後温泉、石手寺、そして月は桂浜恋は、はりまや橋、花は子規記念博物館の連句大会と、伊予から土佐路の秋の空と海の青さを堪能した旅でした。

文部大臣賞、愛媛県知事賞、松山市教育委員会教育長賞、連句協会会長賞、特選六巻、優秀九巻、佳作十五巻、が猫蓑関係で頂いてきた賞です。



